

日本語教師のための素材提供型サイト 「みんなの教材サイト」の運用と再構築

赤澤幸・高野千恵子・磯村一弘・三原龍志

〔キーワード〕 教材開発支援、Webサイトの構築、素材提供、横断検索、本箱形式

〔要旨〕

「みんなの教材サイト」は、海外の日本語教材開発支援事業の一環として国際交流基金日本語国際センター制作事業課が開発し、2002年5月より一般公開を開始した素材提供型サイトである。2006年度からは第五次開発にあたる再構築に着手し、2008年10月にリニューアルオープンを行った。本稿では、国際交流基金の教材制作事業の流れの中でインターネットを通じた素材提供を行うに至った教材支援の経緯について述べ、コンピュータによる協調学習支援（CSCL）研究からの知見と内省アプローチの考え方を取り入れた教材サイト開発の背景とねらい、および、運用開始から6年間の利用状況について報告する。また、再構築の方針をたてるにあたって、2回にわたって行ったユーザーアンケートの結果と、今回の再構築の重点課題である、①素材の追加拡充、②素材検索の利便性の向上、③コミュニティ機能の拡充の概要について報告する。

1. 「みんなの教材サイト」について

「みんなの教材サイト（<http://minnanokyoza.jp/>）」（以下、教材サイト）は、海外の日本語教材開発支援事業の一環として国際交流基金日本語国際センター制作事業課が開発し、2002年5月に一般公開を開始した素材提供型サイトである。運用開始から6年を経て、2008年10月には全面リニューアルオープンを行った。本稿では、これまでの運用と開発の経緯について総括し、新しく生まれ変わった教材サイトの概要について報告する。

1.1 開発の背景

国際交流基金（以下、基金）では、1970年代より海外の日本語教育支援の一環として日本語教材の開発を行ってきた。教材開発にあたってたてた当初の基本方針は、「人材と教材の現地化」（国際交流基金日本語国際センターHP）であり、この基本方針に基づいて1990年代前半までは、教師用参考書、学習者用教材（主教材・補助教材）、視聴覚教材などの完成教材の開発を主に行ってきた。しかし近年、海外における日本語教育の多様化がますます顕著になってきていることを受けて、汎用性のある完成教材の開発ではなく、個々の現場のニーズに合わせて

表1 国際交流基金の開発教材⁽¹⁾

	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代
教師用参考書	『教師用日本語教育ハンドブックシリーズ』(1974~1988)		『外国人教師のための日本語教授法』(1992) 『日本語教授法実践の手引』(1993) 『初心者のための日本語講座開設マニュアル』(1997)	『国際交流基金日本語教授法シリーズ』(2007~刊行中)
(主教材・補助教材) 学習者用教材	『日本語かな入門』(1978) 『日本語はつおん』(1978) 『日本語漢字入門』(1978)	『日本語初歩』(1981)	『日本語中級Ⅰ』(1990) 『日本語中級Ⅱ』(1996) 『中級読解—日本理解へのステップ』(1996)	『初級からの日本語スピーチ』(2004)
辞書		『基礎日本語学習辞典』(1986)		『基礎日本語学習辞典 第二版』(2004) 『日本語でケアナビ』(2007)
視聴覚教材		『日本語教育用ビデオシリーズ』(1981~1988) 『日本語教育用スライドバンク』(1983~1988) 『ヤンさんと日本の人々』(1983)	『続ヤンさんと日本の人々』(1991) 『写真パネルバンク』(1995)	『写真パネルバンク CD-ROM』(2000) 『日本語教育用TVコマercial集』(2002, 2005) 『日本語教育用NHKテレビ番組集』(2002) 『DVDで学ぶ日本語 エリンが挑戦! にほんごできます。』(2007)
素材集			『教科書を作ろう』(1999)	『(続)教科書を作ろう』(2001) 『教科書を作ろう (改訂版)』(2002) 『みんなの教材サイト』(2002) 『児童・生徒のための日本語わいわい活動集』(2005) 『日本語教師必携 すぐに見える「レアリア・生教材」アイデア帖』(2006) 『日本語教師必携 すぐに見える「レアリア・生教材」コレクションCD-ROMブック』(2008) 『日本語ドキドキ体験交流活動集』(2008)

利用することのできる素材集の開発へと、教材開発支援の方針は変化してきている（表1）。

1990年代後半からは、完成教材から素材集への開発方針の変化だけでなく、教材の形態自体もメディアの発達とともに変化してきている。『教科書を作ろう』と『写真パネルバンク』は当初、紙媒体として制作されたが、まず『教科書を作ろう』が、コンピュータを使って教材を制作する教師にとって、より簡単に加工が行えるようデータCD-ROMとして配布された。『写真パネルバンク』も同じく、CD-ROMの特性を活かした検索機能や音声新たに追加され、『写真パネルバンクCD-ROM』として出版された。さらに、基金が主に支援する海外の日本語教師に制作教材をより速く、より新しい内容に更新して提供する手段として、インターネットが注目されるようになった。このような開発の波を受けて、世界のさまざまな国・地域の実状を考慮して、それまでの冊子・ビデオ・CD-ROM・DVDといった固定メディアによる支援体制も保持しつつ、新たな技術を利用した教材制作支援の試みとして、2001年度に教材サイトの開発が始まったのである。

1.2 開発のねらい

教材サイトは、インターネットという新たな媒体による教師支援の試みであったため、インターネットを通じた情報（知識）の共有のための理論的枠組みとして「コンピュータによる協調学習支援（Computer Supported Collaborative Learning：CSCL）研究」からの知見を採用した。また、教材開発は教師の専門性に深く関わる作業が必要とされるため、実際の教材作成の手順をふまえたウェブデザインの実現とともに、教師教育における内省アプローチの考え方も積極的に取り入れられた（島田ほか2003：5）。

これらの理論的枠組みをふまえた上で、開発当初の教材サイトの基本方針は、以下の4点に定められた。

- ① 世界のいかなる地域の日本語教師でも容易に活用できること
- ② 著作権許諾の手続きを必要とせず、自由に活用できる日本語教育用素材を提供すること
- ③ 利用者が素材・情報を受容するだけでなく発信もできる双方向性を確保すること
- ④ 教材に関する日本語教師間の相互交流を促進させ、教師の専門性発達に寄与すること

（島田ほか2003：7）

1.3 現在までの利用状況

2008年8月末日までの教材サイト延べ登録者は61,984人で、そのうち退会者などを除いた実質的な利用者数⁽²⁾は45,754人である（図1）。2006年の調査によると海外の日本語教師の数は44,321人⁽³⁾（国際交流基金2008）、2007年の調査による日本国内の教師数は31,234人（文化庁HP）であり、この数と比べてみても、教材サイトには非常に多くの日本語教師が登録してい

図1 延べ登録者数、利用者数、国・地域数の推移 (2008年8月末日現在)

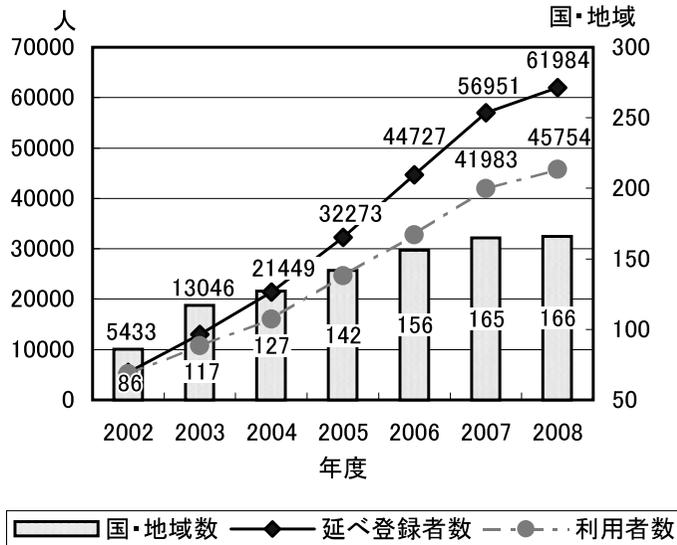


図2 登録者の国・地域別割合 (2008年8月末日現在)

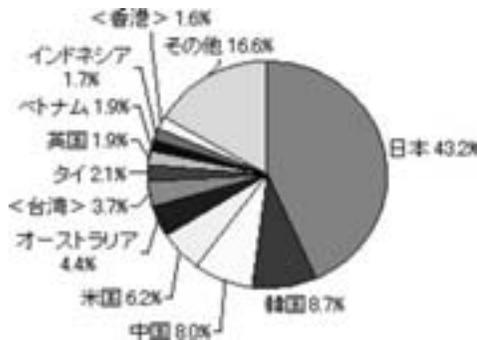
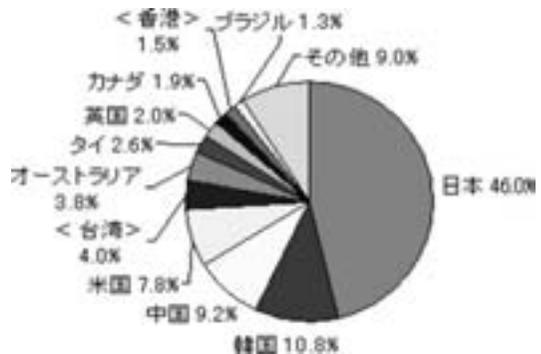


図3 登録者の国・地域別割合 (2003年5月末日現在)



ることがわかる。

登録者の国・地域別の割合は、もっとも多いのは「日本」の43.2%であり、次いで「韓国」(8.7%)、「中国」(8.0%)、「米国」(6.2%)の順となっている(図2)。

教材サイトの一般公開を開始してから1年後の2003年5月のグラフ(図3)⁴⁾と比較してみると、上位4カ国の順位と割合に大きな変化はないものの、近年は登録者数上位10カ国の中に「ベトナム」(1.9%)、「インドネシア」(1.7%)が入ってきており、今までインターネット接続環境の整備が進んでいなかった国においても教材サイトの利用が増えてきた点が指摘できる。また、「その他」の国の割合も増えてきており、教材サイトの存在がより多くの国・地域で周

知されてきていると言えるだろう。

登録者の所属機関種別ごとの割合は、「その他」が74%と圧倒的に多い(図4)。「その他」の登録者とは、民間日本語学校の教師、ボランティア、個人教授、日本語教師養成講座の受講生などである。

アクセス件数は年々増加しており、運用開始2年目の2003年度には100万件を突破し、2007年度には335万7,000件を超えるまでに伸びてきている(図5)。

図4 登録者の教育段階別割合 (2008年8月)

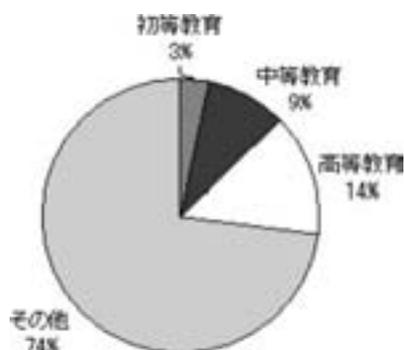
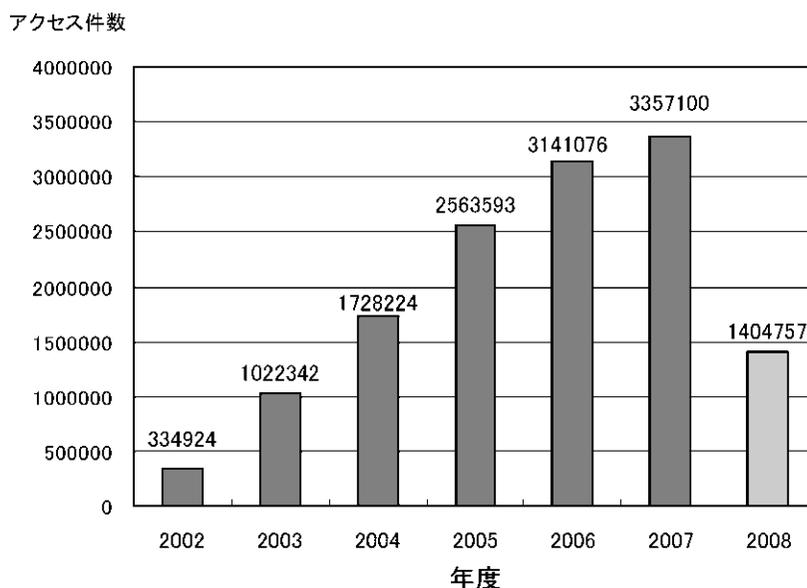


図5 アクセス件数の推移 (2008年8月末日現在)



2. 第一次から第四次における開発の経緯

教材サイトの開発と運用は、2001年4月に着手して以来、PLAN(企画)―DO(開発)―SEE(評価)のサイクルを繰り返して、継続的に機能の拡充を行ってきた。機能拡充のための指針は、①素材の提供、②教材制作についての内省促進、③ユーザー間の相互交流による情報(知識)の共有、④アクセスの利便性、の4点である(表2)。

第一次開発においては、1.2で述べた理論的枠組みに基づいて、日本語教師にとっての使いやすさ(ウェブユーザビリティ)に配慮したサイト仕様を構築しつつ、コンテンツとしてはまず、『教科書を作ろう』を掲載することが開発の重点目標であった。第一次開発では、『教科書

表2 「みんなの教材サイト」開発の経緯 (第一次～第四次)

開発フェーズ	第一次	第二次	第三次	第四次
着手年度	2001年度	2002年度	2003年度～	2004年度～
重点目標	◆サイト仕様の確定 ◆初級日本語素材の提供	◆内省促進機能の拡充 ◆ユーザー間の相互交流の活性化	◆PC利用支援 ◆多言語展開	◆素材の追加拡充
機能拡充の指針	素材の提供	・『教科書を作ろう』音声ファイル48点 ・『写真パネルバンク (I・V)』254点	・『写真パネルバンク (II・III・IV)』261点 ・『写真パネルバンク』音声ファイル515点 ・「CASTEL/J」イラスト6,795点	・『中級読解』読解文10点 ・『中級読解』音声ファイル10点 ・『中級読解』文法78点 ・「まだある初級文法」文法20点 ・『UME』カラーイラスト219点
	内省促進	・「わたしのページ」 ・教師用ナビ>「素材を利用する」「授業を準備する」「教科書を作る」 ・素材に対するコメント投稿機能 ・アイデア投稿機能	・アイデア投稿画面のデザインリニューアル	・「教師用ナビ」>「コンピュータを使う」、「リンク集」
	共有情報の	・「みんなの広場」	・アイデア返信機能 ・ユーザー検索機能	
	アクセスの利便性		・デザインリニューアル (トップページ)	・デザインリニューアル (セクションの新設と名称変更) ・英語版・韓国語版作成 ・検索機能改修

を作ろう』の中から文法148点⁽⁵⁾、教室活動161点、イラスト289点のコンテンツが掲載された。

第二次開発では、引き続き『教科書を作ろう』から音声ファイル48点を掲載し、さらに『写真パネルバンク』の「I. 衣食住と道具」と「V. 日常生活」の写真254点を追加した。また、日本語教師のためのCSCL環境をさらに整えるため、ユーザーが教材サイトに授業のアイデアを投稿することによって、日々の授業や教室活動のアイデアを共有し内省できるよう、アイデア投稿フォームのデザインを改修した。ユーザー間の相互交流を活性化させるためには、ユーザーから投稿されたアイデアに対してコメントが付けられるアイデア返信機能や、教材サイトにどのようなユーザーが登録しているのか登録ユーザーの属性や履歴について調べら

れるユーザー検索機能を新たに設けた。

第三次開発では、それまでの運用期間にユーザーから寄せられた評価⁽⁶⁾も積極的に取り入れられた。基金が教材用素材の提供を始めたころから「提供している教材用素材の利用方法がわからないという日本語教師が多数存在するという問題がある」（島田ほか2004a：3）ことが指摘されていたが、実際、国内外で行ったワークショップでは、教材を作成するためには写真素材や音声素材の加工、編集といった特殊な作業を行う必要があるため、教材制作のためのPCスキルについて知りたいという意見が多く聞かれた（島田ほか2004b：29）。このような意見を受けて、教材サイトは素材を提供するだけでなく、素材の利用方法も積極的に支援する必要があると判断し、「教師用ナビ」をセクションとして新設した。それまで、「教師用ナビ」のコンテンツである「素材を利用する」「授業を準備する」「教科書を作る」はすでにサイト上にあったが、基本的なPCスキルについて説明した「コンピュータを使う」と「リンク集」を新たに執筆⁽⁷⁾、コンピュータを使った教材作成のスキル向上に役立つ情報を提供するセクションとして独立させたのである。また、非母語話者日本語教師にとってのウェブユーザビリティを向上させるため、英語版と韓国語版を作成し、多言語展開を実現させた。新規追加素材は『写真パネルバンク』から引き続き、「Ⅱ. 社会生活」、「Ⅲ. 自然と余暇」、「Ⅳ. 行事」の3シリーズから写真261点と、写真の基本解説にあたる音声ファイル515点を掲載した。イラストは、CASTEL/Jプロジェクト⁽⁸⁾において制作された白黒イラスト6,795点が追加された。

第四次開発では、それまでの改修によってCSCL環境を実現させるための画面構成がほぼ確定しつつあったので、次の段階として、より幅広いニーズに応えるための素材追加を重点目標に設定した。それまで提供してきた素材は初級レベルのものが中心で、特に中上級を教える

表3 教材用素材の内訳（第一次～第四次）

素 材	転載元の教材	点 数	小 計
教 室 活 動	『教科書を作ろう』	161	161
文 法	『教科書を作ろう』	148	246
	『中級読解』	78	
	「まだある初級文法」	20	
イ ラ ス ト	『教科書を作ろう』	289	7,303
	「CASTEL/J」	6,795	
	『UME』	219	
写 真	『写真パネルバンク』	515	515
読 解	『中級読解』	10	10
合 計			8,235

ユーザーから「幅広い日本語教育には対応できない」(島田ほか2004b:20)という指摘を受けていた。そのため、日本語国際センターで実施された海外司書日本語研修用に制作された『中級読解—日本理解へのステップ—』から読解文10点と、新たに作成した音声ファイル10点を追加した。また、読解文中に出てくる中級レベルの文法項目78点と、『教科書を作ろう』では扱われなかった敬語に関わる文法項目20点を新規開発した。イラスト素材は、国際交流基金ニューデリー日本文化センターが制作したインドの中等教育用日本語教科書『UME』の中で使われているカラーイラスト219点が新たに掲載された。

以上の開発を経て、教材サイトは運用開始からの6年間で、教室活動161点、文法246点、イラスト7,303点、写真515点、読解10点の合計8,235点の素材を提供するにいった (表3)。

3. 第五次開発の概要

教材サイトは、このように2001年度の開発着手から複数回の画面改修や素材追加を経て継続的に運営されてきたが、昨今はインターネットの技術もめまぐるしく発展してきている状況であるため、2006年度より教材サイトの全面的な再構築である第五次開発に着手することとなった。

3.1 ユーザーアンケートによる評価と課題

3.1.1 第1回ユーザーアンケート

教材サイトの第五次開発においては、まず、インターネットを通じたユーザーアンケートを2回行い、ユーザーからの評価や要望をできる限り取り込むよう努めた。第1回アンケートは、教材サイトの具体的な利用状況とユーザーからの要望を調査することを主な目的として、2007年3月に実施された⁹⁾。主な調査項目は、①教材サイトを具体的にどのようなように活用しているか、②今後提供してほしい素材は何か、③教材サイトの使いにくいところはどのような点かの3項目である。

①の質問で多かった回答は、「1) 授業を準備するために、「文法 (せつめい)」の解説や例文を見る」(80%)、「10) 授業を準備するために、「みんなのアイディア」に投稿されたアイディアを見る」(77%)、「6) 写真やイラストを使って、授業で使うプリントや教材を作る」(70%)であった。一方、あまりユーザーがしていない利用方法は、少ない順に「8) 音声ファイルを授業で聞く」(18%)、「15) 日本語コンピュータの使い方を知るために、「教師用ナビ」を見る」(20%)、「11) 「みんなのアイディア」に投稿されたアイディアの添付ファイルを使って授業をする」、「13) 「みんなのページ」で興味のある国や機関のユーザーをさがす」(ともに28%)であった (図6)。

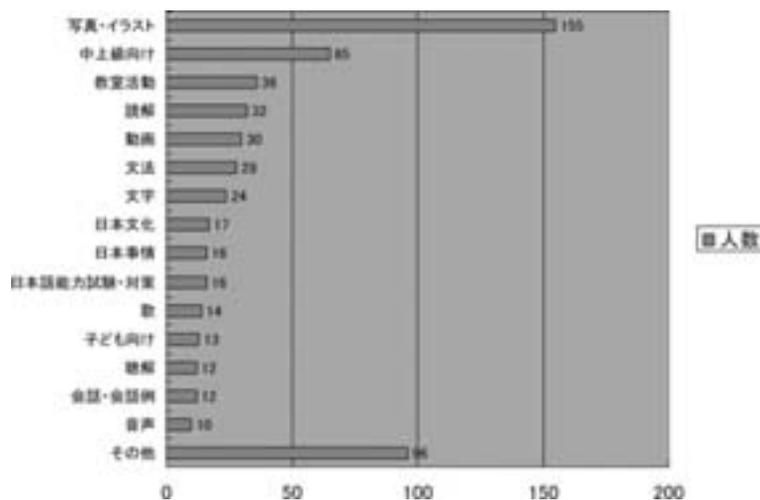
②の今後ほしい素材についての質問では、「写真・イラスト」に対する要望が最も多く、続

図6 質問1：教材サイトをどのように使っているか



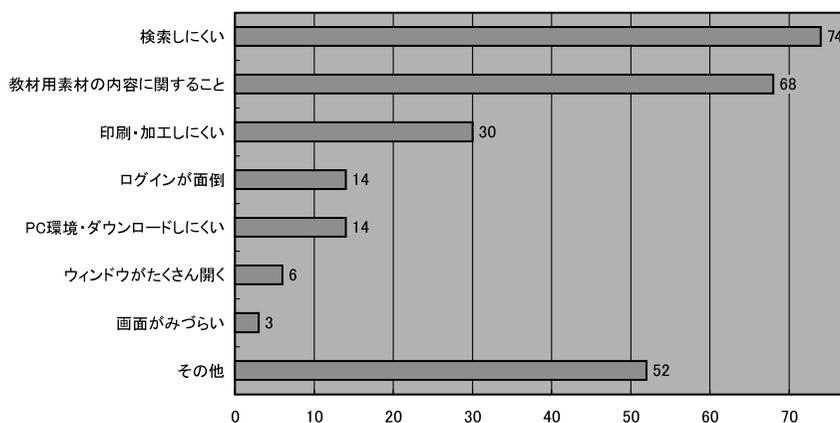
いて「中上級向け教材」、「教室活動」、「読解」の順であった(図7)。この設問は記述式であったが、具体的には「写真・イラストの数を増やしてほしい」、「写真が古いので新しくしてほしい」、「動詞・名詞・形容詞に関するイラストがほしい」といった要望が目立った。

図7 質問2：今後提供してほしい素材



③の質問では、記述式で教材サイトの使いにくいところを尋ねたが、「教材用素材が検索しにくい」という回答が最も多かった(図8)。具体的には、「検索のヒット件数が多すぎるとエラーになってしまい何も表示されなくなるのが不便」、「ほしいイラストがなかなか見つからない」、「文法項目の50音順検索の探し方がわかりにくい」といった意見が見られた。2番目に多かった「教材用素材の内容に関すること」では、「文法解説はもっとくわしいものがほしい」、「イラストのタッチが不統一で使いにくい」、「イラストの質があまりよくない」といった意見があった。

図8 質問3：教材サイトの使いにくいところ



3.1.2 第2回ユーザーアンケート

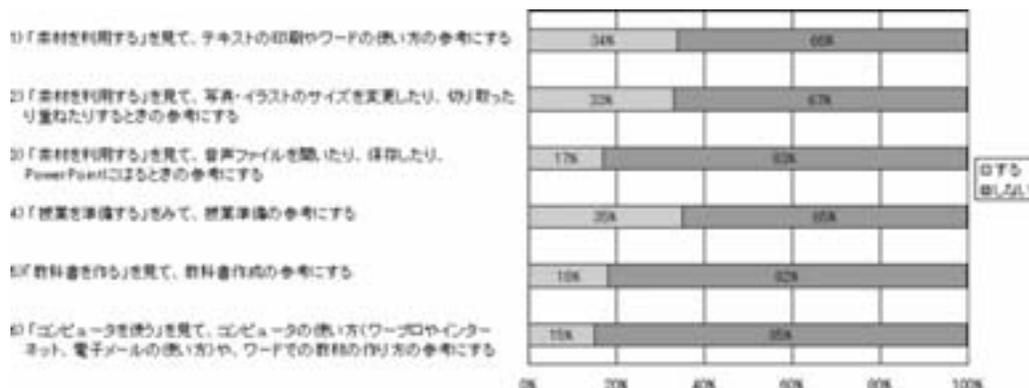
2008年3月に実施された2回目のアンケートでは、ユーザーが教材サイトを具体的にどのように使っているかをくわしく調査するため、登録してからのログイン回数が50回以上のユーザーを対象に、①「教材用素材」の具体的な使い方、②「教師用ナビ」の利用の度合いの2点について調査した⁽¹⁰⁾。

①の「教材用素材」の利用については、「そのまま使う」と答えたユーザーは、どの素材についても30%にいたらなかった。一方、「(教室活動の)タスクシートやモデルテキストを、言葉を入れかえたり、表記を変えたりして使う」、「写真・イラストの画像を画像ソフトで加工して使う」、「(文法の)解説や例文をワープロの文書にコピー&ペーストして、言葉を入れかえたり表記を変えたりして使う」といった方法で、加工や自分なりの変更を加えたうえで素材を利用しているユーザーが多いことも明らかになった。

②の「教師用ナビ」の利用については、「素材を利用する」、「授業を準備する」、「教科書を作る」、「コンピュータを使う」の4つのサブセクションについてどの程度参考にしているのか尋ねたところ、全体的にどのサブセクションも利用の度合いは低く、特に日本語環境の設定方

法やワープロ・電子メール・インターネットの利用といった基本的なPCスキルについて解説した「コンピュータを使う」は15%のユーザーにしか利用されていないことが確認された（図9）。

図9 「教師用ナビ」を参考にしていますか



この2回にわたるユーザーアンケートの結果、ユーザーにとって教材サイト利用の主目的は授業準備のために「教材用素材」を利用することであり、素材の利用方法についても教材サイト上の素材をそのまま使うのではなく、それぞれの教育環境に合わせて加工や編集を行って使っていることがわかった。一方、それまでの開発次において拡充されてきた、内省促進やPCスキルの向上を支援するために設けられた「教師用ナビ」やユーザー間の情報共有のためのコミュニティ機能「みんなの広場」は、この時点では予想したほど使われていないこともわかった。「教師用ナビ」は、第三次開発においてユーザーから寄せられた評価により拡充されたセクションであったが、PC環境の急速な発展により掲載情報がすでに現在の技術と乖離していることも、一つの要因と考えられる。また、開発当初からのほんの数年の間に日常的にパソコンを使う人が急激に増え、基本的なPCスキルについては教材サイトでサポートする必要性が低くなっているとも考えられるだろう。

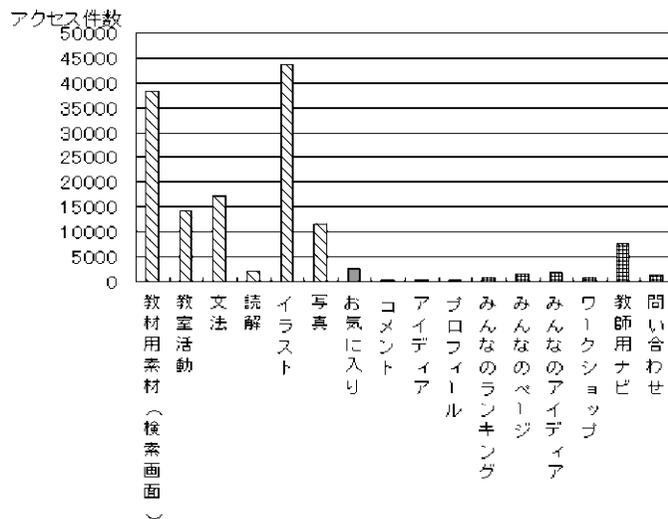
3.1.3 再構築のための課題

以上のユーザーアンケートによる評価とログ解析による利用状況の分析などをふまえて、再構築作業に関わるさまざまな条件を勘案した結果、第五次開発では①素材の追加拡充、②素材検索の利便性の向上、③コミュニティ機能の拡充の3点に取り組むことが決定された。

「教材用素材」は、毎月のログ解析で調査している「セクション・ページ別アクセス件数の内訳」（図10）を見てもわかるように、教材サイトの中で最もアクセス数の多いコンテンツである。また、日々のユーザーからの問い合わせや第1回ユーザーアンケートでも、幅広い素材の追加を求める声が多く聞かれた。これまでは、1.1で述べた教材開発支援の方針の変化に

のっとり、教材サイト上の素材は、日本語国際センターの制作した既存の教材をデジタル化し掲載するという流れで提供してきたが、できるだけ新鮮な素材を提供しつづけていくためにも、今後は教材サイト独自の素材を開発していくことが肝要であると確認された。さらにサイト運営のための技術面でも、これまでは運営者が自由に素材を追加する管理機能を有していなかったため、新規の素材を教材サイトに掲載するためにはシステム会社に発注しなければならず、迅速にユーザーへ素材を提供することができないという問題があった（赤澤ほか2008：331）。そのため、迅速な素材の提供を可能にするためには、サイト構築の専門的な知識を有さない運営者にとっても、簡単に素材を載せられるような管理機能の装備が必須であることが確認された。

図10 セクション・ページ別アクセス件数の内訳 (2008年8月)



検索機能については、第1回ユーザーアンケートでも「教材サイトの使いにくいところ」として1番に挙げられた点である。今までのサイトでは、「写真・イラスト」のページのように、種類の異なる素材が同じ検索対象に設定されていることから、十分な絞り込みを行うことができないという問題があった。また、どのような素材が教材サイトにあるのか、全体を一覧できるような画面がないため、膨大な数の素材が提供されているにもかかわらず、その魅力がユーザーに伝わりにくいという問題もあった。そこで、まず教材サイトにどのような素材があるのか一覧できること、そして、ほしい素材がキーワード検索のような簡便な方法によって速く見つけられるような検索機能を設けることが確認された。

コミュニティ機能については、3.1.1の第1回ユーザーアンケートの結果（図6）や「セクション・ページ別アクセス件数の内訳」（図10）に表れたように、相互交流の場を利用してい

るユーザーはあまり多くはなかった。しかし、教材サイトは教材用素材を提供すると同時に、世界中に存在する日本語教師たちにとって交流の場として効果的に利用されることも開発のねらいの一つである。実際、教材サイトの「わたしのページ」、「みんなの広場」のセクションは、異なる場所にいる学習者の協調的グループ学習を可能とするCSCL環境として「情報参照層」、「個人作業層」、「会話層」を指摘した岡本（2000）の考え方に基づいて、「会話層」の充実のために実装された機能である。島田ほか（2003：13）では、「みんなの広場」へのアクセス数は「教材用素材」に次いで多く、ユーザーはほかのユーザーへの関心も高いことが指摘されていた。しかし、運用6年を経て「みんなのランキング」や「みんなのページ」など、ユーザー間コミュニティのためのページへのアクセスが大幅に減ってしまっているのは、教材サイトが実装しているコミュニティ機能のあり方が、現在のオンラインコミュニティの発展に追いついていないからかもしれない。海外のインターネット環境もここ数年で急速に発展し、SNS（Social Networking Service）の利用も多くの国において一般的になりつつある。教材サイトのコミュニティ機能は、現在人気のあるオンラインコミュニティで提供されているサービスを大いに参考にして、日本語教師にとって有用なコミュニティ機能の開発を新たに考え直す必要があると確認された（高野ほか2008：17）。

3.2 主な改修点

3.2.1 素材の追加拡充

第五次開発の全面リニューアルオープンとともに新しく追加される素材は、イラスト「初級語彙イラスト集」308点、教室活動「季節の活動」109点である。

「初級語彙イラスト集」は、語の導入に使えるようなイラストが少ないというユーザーからの意見を取り入れて独自に開発した素材である。教材サイトにはすでに7,303点ものイラストが掲載されているが、練習タスク用のイラストや日本語辞書の用例に付与するイラストとして開発されたものであるため、語の導入用イラストとしては使いにくいものが多い。この要望に応えるため、現行の日本語能力試験の初級レベル（3、4級）の語彙表から動詞を抽出し、308点の基本動詞イラストを新規開発した。

また、教材サイトが主な対象としている海外の日本語教育の現場では、日本語の教授だけでなく、日本の文化や習慣が伝えられるような教室活動が求められることも多い。そのため、日本の季節の風物について理解を深めつつ日本語を使った教室活動ができるよう「季節の活動」を新たなシリーズとして追加した。

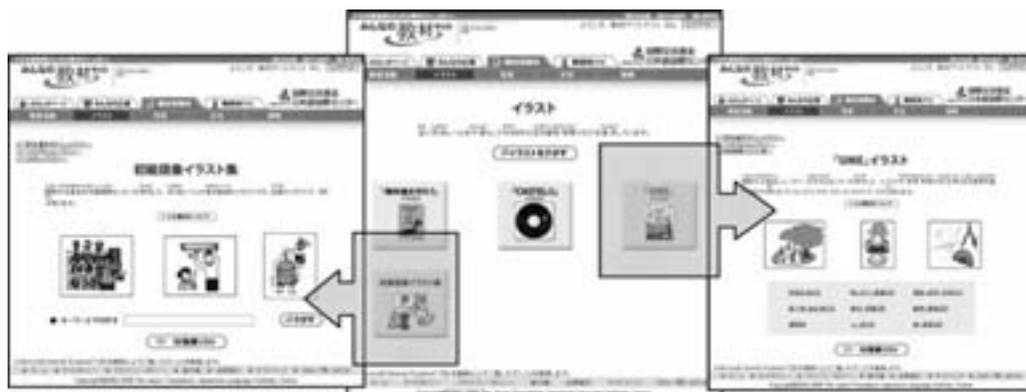
3.2.2 素材検索の利便性の向上

「ほしい素材が見つけにくい」という声が聞かれる原因の一つは、素材の整理が十分にされないまま教材サイト上に掲載されてきた点にあると考えられる。1.1で述べたように、教材サ

イトに掲載されてきた素材は、すでに固定メディアとして制作されたものをデジタル化したものである。そのため、教材サイトに掲載するにあたっては、固定メディアとして開発された時の姿をなるべく崩さないよう配慮してきたが、それが返って教材サイト上では統一性に欠ける結果となってしまったのだと言える。第五次開発では画面デザインからの全面リニューアルを行うため、すべての素材の整理を改めて行い、それぞれの素材特性に合わせた横断検索の画面を実装した。

固定メディアとして開発された教材を教材サイトに掲載させていく方針は、今後も堅持していく予定である。この方針にのっとり効率よく素材を追加していくためには、追加教材が元の体裁を保持しつつ教材サイトの統一性も維持することもできる掲載方法が必要であると考え、「本箱形式」と呼ぶ画面仕様を採用した(図11)。個々の素材特性によって、ほしい素材を見つけやすく、かつどのような素材があるのかも見やすくするために採用した画面仕様である。また、キーワード検索のための文字入力難しい日本語非母語話者ユーザーのため、50音順リストやトピック別リストを充実させた。

図11 「本箱形式」の例(イラスト)



3.2.3 コミュニティ機能の拡充

教材サイト上のコミュニティを活性化するため、第五次開発では、ユーザーから気軽にサイトに参加できるような画面仕様を実装することを重点課題とした。まず、利用者全員が「わたしのページ」を公開し、そこでハンドルネーム、国・地域、教育機関の種別といった基本情報を必須公開とすることで、すべてのユーザー間で最低限の属性情報は共有するようにした。

また、ユーザーからの活発な素材・アイデアの投稿を促すため、素材・アイデアの投稿画面を簡素化し、写真1枚からでも手軽に投稿できる画面構成に改修した。この投稿ページは、開発初期のころには教師の内省を促すページとして改修されたものであったが、近年YouTubeなどに見られるような、インターネット上で情報を共有する機能をさらに重視した結果

でもある。ユーザーから教材サイトへのフィードバックとしては、教材サイト上の素材・アイデアに対して気軽にコメントが送れるよう、クリック1つで投票できる「役に立った投票」を設け、「コメント」を素材画面のすぐ下に書き込めるような画面仕様に改修した。コメントの入力文字数制限も、今までの200字から4,000字に増やした。

4. 今後の課題

教材サイトは今後も素材と機能の拡充を継続していくが、3.1.3で述べた3つの課題のうち、2009年度も引き続き取り組む課題は「素材の追加拡充」と「コミュニティ機能の拡充」である。素材提供型サイトとして常に新鮮な素材を迅速に提供しつづけていくことは、教材サイトの使命であると言えるだろう。コミュニティ機能の拡充について、教材サイトは教材を作成する日本語教師に自由に素材を利用してもらうことはもちろんのこと、ほかのユーザーとのコミュニケーションをとおして教師として成長しつづけられるようなCSCL環境を整えることも肝要であると言える。近年ではWeb2.0やSNSの普及によってオンラインコミュニティの利用も一般的になってきたため、そのような新しいICTの利用に慣れたユーザーが教材サイトを不便なく使っていけるよう、最近のICTの仕様も積極的に取り入れていく必要があるだろう。

また、現在は登録者の半数近くを日本国内のユーザーが占めるが、海外のユーザーを増やすべく、引き続き広報に努めることも必要である。1.1で触れたように、インターネットが教材提供の手段として注目され教材サイトが開発されたのも、そもそもは海外の日本語教育を意識してのことである。さらに、教材サイトの開発初期において重点的に掲載され、現在も教材サイトの主要なコンテンツである『教科書を作ろう』は、海外の中等教育段階で教える教師を対象として制作された初級日本語素材集であるが、この素材が最も活用できる中等教育段階で教える登録ユーザーは、全体のわずか9%しかない(図4)。2006年の海外日本語教育機関調査において初等・中等教育段階で教える教師数は全体の28.3%(国際交流基金2008)であったことを鑑みても、教材サイトの提供する素材をより効果的に活用できる教育段階や学習レベルに携わる日本語教師の登録は、まだ多くはないと言えるだろう。今後も、教材サイトの内容と機能の充実とともに、もっと多くの日本語教師に活用してもらえよう広報活動にも力を入れていくべきだと考える。

〔注〕

⁽¹⁾ 斜体は非売品。

⁽²⁾ 「実質的な利用者数」とは、退会者および事務局からメールでの連絡が取れなくなったため、一時的に利用停止にしている登録者を除いた数である。

- (3) 海外で教える日本語教師のうち、7割が日本語非母語話者教師である。
- (4) 2003年5月の累計登録者数は6,528人、月間アクセス数は97,297件である。
- (5) 資料16点を含む。
- (6) ユーザーからの反応や評価を直接得る機会として、日本語国際センターの非母語話者日本語教師向けの研修授業(計23コース)でのワークショップ、日本国内での日本語母語話者教師向けの講演・勉強会、海外6カ所(マニラ、ベルン、ベルギー、ブダペスト、デュッセルドルフ、パリ)でのワークショップなどを実施した。
- (7) 「コンピュータを使う」の執筆にあたっては、富山大学留学生センターの深澤のぞみ先生(現在、金沢大学)、濱田美和先生、後藤寛樹先生にご協力いただいた。
- (8) CASTEL/J (Computer Assisted System for Teaching & Learning/Japanese) プロジェクトとは、文部科学省の科学研究費補助金の支援を受けて、国際交流基金発行の『基礎日本語学習辞典』の用例に基づいたイラストと音声を作成し、データベース化を行った研究である(研究代表者:小松幸廣・国立教育政策研究所教育研究情報センター総括研究官)。
- (9) 58の国・地域から984人の回答が得られた。回答率は3.9%。
- (10) 50回以上ログインしているユーザー2,898名を対象に実施し、32の国・地域から309名の回答が得られた。回答率は10.7%。

〔参考文献〕

- 赤澤幸・磯村一弘・高野千恵子・三原龍志 (2008) 「日本語教師を対象とした素材提供型サイトの利用動態に関する調査研究—「みんなの教材サイト」を例に一」、『日本語教育学世界大会2008第7回日本語教育国際研究大会予稿集』第3分冊、329-332、大韓日語日文学会
- 岡本敏雄 (2001) 『インターネット時代の教育情報工学1 ニュー・パラダイム編』森北出版
- 高野千恵子・赤澤幸・磯村一弘・三原龍志 (2008) 「海外の日本語非母語話者教師を対象とした教材制作および授業支援のためのWebサイトの運用と再構築について」、『日本教育工学会研究報告集』JSET08-1、13-20、日本教育工学会
- 国際交流基金 (2008) 『海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・2006年—(概要)』国際交流基金国際交流基金日本語国際センター「第10回海外日本語教育研究会 日本語国際センターの教材開発の変遷」〈http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/chek/wld_03_22_01.html〉2008年12月25日参照
- 島田徳子・古川嘉子・麦谷真理子 (2003) 「インターネットを利用した日本語教師に対する教材制作支援—「みんなの教材サイト」<http://www.jpf.go.jp/kyozai/>の構築と運用—」、『国際交流基金日本語国際センター紀要』第13号、1-18、国際交流基金日本語国際センター
- 島田徳子・古川嘉子・久保田美子 (2004a) 「日本語教師の教材制作支援サイト「みんなの教材サイト」の構築と運用」『日本教育工学会研究報告集』JSET04-1、19-22、日本教育工学会
- 島田徳子・古川嘉子・久保田美子・麦谷真理子 (2004b) 「日本語教師のためのCSCL環境「みんなの教材サイト」の開発と評価—利用者の視点を重視したサイト開発と運用の実際—」『国際交流基金日本語国際センター紀要』第14号、13-32、国際交流基金日本語国際センター
- 文化庁「平成19年度国内の日本語教育の概要 外国人に対する日本語教育の現状について 3 教師数について」〈http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaichousa/h19/gaikoku_3.html〉2008年12月25日参照